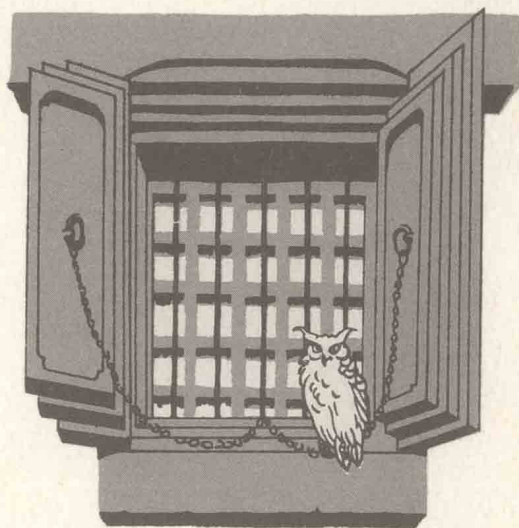


有島武郎研究叢書

第一集

有島武郎の作品 (上)

有島武郎研究会編



ゆう ぶん しょ いん
右 文 書 院

有島武郎研究叢書

第一集

有島武郎の作品 (上)

有島武郎研究会編

《有島武郎研究叢書》第一集 有島武郎の作品（上）

印刷

一九九五年五月二〇日

発行

一九九五年五月二〇日

編者

有島武郎研究会

石丸晶子・西垣勤

発行者

三武義彦

製作者

株式会社さつき書院

発行所

株式会社右文書院

〒一〇一 東京都千代田区神田神保町一―三七

電話〇三―三二九二―〇四六〇 FAX〇三―三二九二―〇四二四

振替〇〇―二〇一六一―〇九八三八

©1995, Arisimatakenkenkyukai

Printed in Japan

ISBN4-8421-9501-0 C3395

*万一、落丁・乱丁本など不良品がありました場合には、直接小社までお返し下さい。送料負担にてお取り替えさせていただきます。

はしがき

有島武郎を、今どう読むか。

今、世界は激動の時代を迎えている。ベルリンの壁の崩壊、ソビエト連邦の崩壊。他方で、民族対立と、闘争。そして深刻な環境破壊の進行。さらに重要な、依然として続く資本主義ないしは社会主義という国家体制の矛盾。その中で、今ほど、一人一人の人間が、何が真実で、何が必然で、何が正義か、どういう生の、どういう世界の展望を持つかを、考え、決断し、生きることを迫られている時はないかも知れない。

有島武郎は、やはりそういう、姿は違うが、激動の一九一〇年代、二〇年代を、その時代の課題をともに背負って生きた数少ない作家、思想家の一人、だと言える。今、我々が現代の課題の中で生きる時、そのために直さなくてはならぬ作家、思想家の一人が有島武郎であることを切実に感じているのである。

有島武郎を分かりにくい作家だと評したのは、本多秋五氏だが、それは時代の複雑さを見つめ、多様な課題を背負い、全人間的に生きようとし、そして死に至ったその故でもあると言えるだろう。

その有島武郎を、没後七十年を記念して、今までの研究成果をふまえ、それを一歩、新しく踏み出すために、多様な観点からの研究を結集して、全十集の、『有島武郎研究叢書』を刊行することにした。

全十集のうち、作品論に三集をあて、新鮮な小説論、文体論などの方法、認識によって、作品を見つめ直すとともに、その周囲に、有島武郎と社会、有島武郎と愛／セクシュアリティ、有島武郎とキリスト教、有島武郎と

西洋、有島武郎と場所、有島武郎と評論、有島武郎と作家達の七集で取り囲み、総合的、多面的、歴史的に有島武郎をとらえようとしている。

その結果については、読者の評価にゆだねるしかないが、編者としては、多くの力作を得て、有島武郎研究を進展させたものと思っている。ご協力いただいたかたがたに謝意を申し述べる。また、本研究叢書は、右文書院社長三武義彦氏に、最初の企画から、積極的な提言、協力を戴き、また、編集部青柳隆雄氏に、編集、刊行について、全面的にお世話になった。厚くお礼申し上げます。

一九九五年三月

有島武郎研究会・編集責任者

内田 満
江種 満子
西垣 勤
福田準之輔

*この叢書の装訂は『有島武郎著作集』第一輯（大正六年十月十八日、新潮社）にならったものです。版面の使用を許諾していただいた、神尾行三・有島明朗両氏ならびに新潮社のご好意に感謝いたします。

有島武郎研究叢書第一集

有島武郎の作品（上）

目

次

はしがき

1

有島武郎の思想と文体

遠藤好英

9

『かんかん虫』論——定稿成立まで——

内田真木

33

『老船長の幻覚』

石丸晶子

53

『お末の死』考——「聖」なる豊平河畔物語——

大田正紀

73

『宣言』論

吉田俊彦

95

『迷路』論——救済としての胎児——

大里恭三郎

113

椿田と迷宮——小説ジャンルとしての『迷路』——

中村三春

133

『死と其前後』論

西垣 勤

149

『カインの末裔』を読む

蒲生芳郎

165

有島武郎の初期文芸におけるゴシック風文体
リース・モートン

185

年譜 『有島武郎の作品（上）』関連項目を中心に

山田昭夫／内田満編

209

資料紹介（山田昭夫／佐々木靖章編）

淋しさに（与謝野晶子）

225

有島武郎の作品（上）

有島武郎の思想と文体

遠藤 好英

一

1 文語文から口語文へ

近代の文章の歴史は言文一致文に始まり、それが口語文となり、それが展開し成熟する経過として辿ることができる。このことはまた、文語文が次第に衰え、勢力を失い、書かれなくなる過程でもある。口語文の成長と文語文の衰退とは、近代の文章の歴史の表と裏なのである。近代の文章史の両面とも言える。

この近代の文章史を變遷として捉えようとすれば、文語文から口語文が生まれて文語文と平行して行われ、その中で口語文が成長發展する姿となる。文語文と口語文との間で、文語文から口語文へと主役の座を交替することになる。この交替するについて、それはいつなのか、どのような状況でなのかは、文章の種類によって早い遅いの違いがある。それぞれの種類の中で、文語文、口語文をそれぞれどう捉え、なにによって代表させるかによっても、違ってくる。文語文、口語文といっても、その中には両者の混じり合っている程度を含めて、いろいろ

な内容が考えられるからである。実用文として表現意図が割合はつきりしている手紙文についてみると、候文を含めて七種類に分けられるのである。⁽¹⁾

文語文から口語文へと交替する時期が文章の種類に関して、どのように違うかに触れて次のような指摘がある。なお、以下の引用に当っては漢字・漢語を直接問題にする時を除き、振り仮名を取り、漢字は新字体とした。

さて又、以上に説いた文章体と並んで口語体（言文一致体）といふ一体がある。この体の文章は明治廿一年頃山田美妙斎の公にしたのが始めであるが、爾来小説家の間に試みられて漸々に発達し、追々一般の論文や著述にも用ゐられ、新聞紙の雑報にも採用さるに至つた。今日では小説は尽く口語文となり、論文も著訳も新聞紙の雑報も停車場の掲示札も小学校の読本も大半は口語文で綴られてをる。兎も角も口語文は将来益々発達し、日本の文章がこの一体で統一されて了ふのは遠くはあるまい。

これは芳賀矢一・杉谷台水合編『作文講話及文範』（明治四五年二月序、大正五年九月改訂縮刷発行）の第四講「国文の諸体」の一節（大正五年一〇月改訂縮刷再版による 富山房 五〇頁）であるが、小説はすべて口語文で書かれ、論文も大半は口語文で綴られているというのである。これは明治末年当時の文章世界の大まかな状況を伝えている。小説の言文一致体採用率は、すでに一〇〇%になって二、三年を経過しているからである。⁽²⁾しかし、法律の文章は文語文、目上に対する手紙文、新聞も社説などの論説文は文語文が多かった。

なお、右の文で「論文」がさす内容は、本文についてみると直接には議論文をさし、時に説明文や勸説文とさ

れた文章に当てはまる。すなわち、議論文には、高山林次郎「月夜の美感」、上田敏「文芸論集」、山路愛山「伊藤博文論」などの一節が引かれ、説明文及勸説文には、坪内逍遙「倫理と文学」の一節が示されているからである。標題からも推察される通り思想を内容とした文章であり、直接には、ある事に対する主張であり、議論であったり説明の場合もあるということになる。

五十嵐力『新文章講話』（明治四十二年一〇月発行、大正二年二月六版 早大出版部）にも「議論文は単に論文とも又勸説文ともいひ」（五四八頁）とある。当時の理解であり、用法なのである。

2 思想と文章——有島の『惜みなく愛は奪ふ』——

有島の思想と文体を考えるについて、有島のどのような文章を取り上げたらよいのだろう。文章の種類からは、それは議論文である。それは、五十嵐力によれば次のように説かれる。

読者を動かして我が意見を納得せしむるを主眼とするもの、説明文に相手を服させやうとする個人的企図の加はった文章といつてよい。従つて、主として理解力に訴ふるけれども、其の主張に勢力光彩あらしめるために想像的感情的の文飾をも加へる。四種（筆者注、記実文、叙事文、説明文、議論文をさす）の文章中人格に待つことの最も多いものである。

（『新文章講話』五四八頁）

右の議論文にふさわしい有島の思想を内容とした文章として、小稿では『惜みなく愛は奪ふ』を取り上げること

としたい。大正九（一九二〇）年六月五日発行の「有島武郎著作集」第十一輯（叢文閣）の文章を取上げる。

この文章に対して有島は、本文の中、冒頭一の終りの段で「若し私のこの貧しい感想を読む人があつた時」とか、「この感想は無視さるべき無益なものであらう。」とか述べて、「感想」と言っている。それが、全体の終りに近い二八では、「私の発表したこの思想に」と「思想」と言っている。この作の初稿が最初、大正六年六月号『新潮』（第二六卷第六号）に掲載された時は、「記者便り」の欄に「巻頭の有島武郎氏の評論は」と「評論」と見える。感想・思想・評論のいずれとも見なせることになりそうだが、ここでは、「愛」に関する有島の思想の内容とする文章、と考えることにする。その際、「思想」は「直観内容に論理的反省を加えてでき上がった思想の結果。思考内容。特に体系的にまとめたものをいう。」に従う。（『日本国語大辞典』の「思想」の項）

議論文は、先の「国文の諸体」で言う所では、大方が口語文になっていた。有島の『惜みなく愛は奪ふ』にしても、刊行が大正九年なので口語文になっている。もっとも、次のような言葉遣いも見られる。

意識的と然らざるとに係はらず

而してかゝる悟性と見ゆるものか

このような文語表現がある外にも、「ナリ活」の形容動詞や指定の助動詞には「余りなる」（二二）「所産なる詩」（二二）が用いられており、「べし」の連用・連体形は、上接の文語動詞・助動詞とともに多用されている。「報ゆるべく」（六）「斥けらるべきものだ」（二二）「成就さるべきものだ」（一九）「人に伝ふべき表現」（二二）

といった具合である。他に「理解を容易ならしむるために」(二二)などもある。口語文として成熟したのではないのである。しかし、これらはいわば文語文の名残りであって、全体としては指定・断定表現について文末が「だ」となる「だ調」の口語文である。最初の部分で「誰がそれを知りたいと希はぬだらう。」と見え、「これこそ私の存在が所有する唯一の所有だ。」と文末の基本が「だ」になっているからである。

ここで、有島の文章の口語文への推移を『有島武郎全集』について見ておこう。

3 有島武郎の口語文への歩み

第一巻所収の作品は、明治二五年の「探海記」から始まって「露国革命党の老女」(明治三八年四月)まですべて文語文である。明治四〇年六月執筆の「かんかん虫」が最初の口語文の作品である。アメリカに居て書かれた次の「イブセン雑感」は又、文語文になる。この後、口語文の作品は「札幌独立基督教会沿革」と「米国学生生活」「たとへばなし」で、いずれも「です・ます体」の丁寧体である。結局三二作(独旅短信を一括して一とする。)の中、右の四作だけが口語文となる。明治四一年までの作品についてのこと。

第二巻に入っては次の通りである。所収一四作の中、文語文は次の三つの場合である。(一)劇の脚本が、「老船長の幻覚」「サムソンとデリラ」「洪水の前」の三作について文語文である。(二)書簡体の『宣言』が二回の葉書で文語文である。(三)小説については「西方古伝」だけが文語文である。まとめると、小説については一作を除いて他はすべて口語文になっているのである。以上は明治四三年四月前後以降の作品についてのこと。

「西方古伝」が明治四〇年草稿執筆で文語文最後の作品となる。

総じて、明治四〇年から見始める口語文による作品は、その後次第に多くなり、「西方古伝」を最後に文語文はなく、四一年以後は口語文によってだけ作品を書いたことになる。それで、『惜みなく愛は奪ふ』は有島の作品として、口語文にかなりの経験を積み、習熟の度を加え個性的度合いの濃いものと推察されるのである。このことは、有島の文体を考える基本的な条件が一応満たされていることを意味するといえる。近世以前の大方の文章は文語文として型をもち、それが人々を拘束し、人々は各自の人間を表すことより格に合った文章を書くことを心がけた。それに対して口語文は、筆者の人間を反映する。同時に文章の種類ごとに特徴ある文章となる。そこで、口語文は筆者の人間と、文章の種類との二つの意味で文体をもつようになるのである。このことは当時の文章評価や文章を書く際の目標としても考えられていた。次にそのことを見ておくこととする。

4 近代の文章の文体への道

島村抱月は、「言文一致の現在、未来」⁽⁴⁾の中で、文体について次のように述べている。

▼文章の目的 は意味を表はすばかりのものではない。意味を表はすと同時に、感情を通じ、さうして又、作者の人格を現はさねばならぬ。処で今のやうに修辭もなく、又作者特種の文体もなく、幾んど同一様の、言葉其儘の文体であつたなら、どうして感情を通じ、人格を現はすことが出来やう。意味を伝へるだけが関の山である。だから修辭の法を以て此文章の欠点を補はなければならぬ。さうすると自然

▼文体 もいろ／＼のものが出来てくる。亦出来てこなければならぬ。今のやうに、どれを見ても変りがない